

研究評価委員会  
「固体高分子形燃料電池利用高度化技術開発事業」(中間評価)分科会  
議事録

日 時： 平成 29 年 10 月 20 日 (金) 9 : 30 ~ 18 : 30

場 所： WTC コンファレンスセンター フォンテーヌ

〒105-6103 東京都港区浜松町 2-4-1 世界貿易センタービル 38 階

出席者 (敬称略、順不同)

<分科会委員>

分科会長	松永 守央	公益財団法人北九州産業学術推進機構	理事長
分科会長代理	里見 知英	燃料電池実用化推進協議会	事務局 次長
委員	安部 武志	京都大学大学院 工学研究科	物質エネルギー化学専攻 教授
委員	亀山 秀雄	東京農工大学	名誉教授
委員	小島 康一	トヨタ自動車株式会社	東富士研究所 先進技術開発カンパニー 主査
委員	出来 成人	神戸大学	名誉教授
委員	山田 耕太	旭硝子株式会社	商品開発研究所 主幹

<推進部署>

近藤 裕之	NEDO	新エネルギー部	部長
板倉 賢司	NEDO	新エネルギー部	統括主幹
大平 英二 (PM)	NEDO	新エネルギー部	主任研究員
門脇 正天	NEDO	新エネルギー部	主査
吉積 潔	NEDO	新エネルギー部	主査
戸塚 大輔	NEDO	新エネルギー部	主査
大島 康弘	NEDO	新エネルギー部	主査
蕨沢 仁	NEDO	新エネルギー部	主査

<実施者※メインテーブル着席者のみ>

篠原 和彦	FC-Cubic	研究所	所長
金坂 浩行	FC-Cubic	研究所	副所長
陸川 政弘	上智大学	理工学部	教授
平井 秀一郎	東京工業大学		教授
河瀬 元明	京都大学大学院	工学研究科	化学工学専攻 教授
内本 喜晴	京都大学	人間・環境学研究科	教授
岩澤 康裕	電気通信大学	燃料電池イノベーション研究センター	センター長
太田 健一郎	横浜国立大学		名誉教授
石原 顕光	横浜国立大学		特任教授
稲葉 稔	同志社大学	理工学部	教授
飯山 明裕	山梨大学	燃料電池ナノ材料研究センター	センター長
内田 裕之	山梨大学		教授

宮武 健治	山梨大学 教授
吉武 優	東京理科大学 工学部 客員教授
竹中 壮	同志社大学 理工学部 教授
井上 秀男	石福金属興業株式会社 技術部 主任研究員
藪内 友子	東レ株式会社 H S 事業開発推進室 主席部員
長門 康浩	旭化成株式会社 化学・プロセス研究所 主幹研究員
高木 善則	SCREEN ホールディングス株式会社 新規事業統轄部 技術部 技術二課 課長
堀内 歩	日清紡ホールディングス株式会社 新規事業開発本部 開発室 専門課長
井奥 淳	ユメックス株式会社 技師

<評価事務局>

保坂 尚子	NEDO 評価部 部長
坂部 至	NEDO 評価部 主査
中井 岳	NEDO 評価部 主任

## 議事次第

(公開セッション)

1. 開会、資料の確認
2. 分科会の設置について
3. 分科会の公開について
4. 評価の実施方法について
5. プロジェクトの概要説明
  - 5.1 「事業の位置付け・必要性」、「研究開発マネジメント」、「研究開発成果」及び「実用化・事業化に向けての見通しおよび取り組み」について
  - 5.2 質疑応答

(非公開セッション)

6. プロジェクトの詳細説明
  - 6.1 プロセス実用化技術開発 (1/2 助成事業)
    - 6.1.1 コアシェル触媒の大量生産技術開発
    - 6.1.2 高信頼性炭化水素系電解質膜のプロセス実用化技術開発
    - 6.1.3 フッ素系高分子電解質原料の低コスト合成プロセス開発
    - 6.1.4 高生産性、信頼性を有する CCM 量産製造装置開発
    - 6.1.5 カーボンセパレータの製造プロセス及び当該品質管理プロセスに関する実用化要素技術開発
    - 6.1.6 高性能で低価格な炭素被覆金属セパレータ製造方法の確立
  - 6.2 普及拡大化基盤技術開発 (委託事業)
    - 6.2.1 先進低白金化技術開発
    - 6.2.2 セルスタックに関わる材料コンセプト創出 (高出力・高耐久・高効率燃料電池材料のコンセプト創出)
    - 6.2.3 金属原子直接担持による触媒高性能化コンセプトの提案
    - 6.2.4 カソード高機能化に資する相界面設計
    - 6.2.5 触媒・電解質・MEA 内部現象の高度に連成した解析、セル評価
    - 6.2.6 酸化物系触媒の革新的高機能化のためのメカニズム解析
7. 全体を通しての質疑

(公開セッション)

8. まとめ・講評
9. 今後の予定
10. 閉会

## 議事内容

(公開セッション)

1. 開会、資料の確認  
開会宣言 (評価事務局)  
配布資料確認 (評価事務局)
2. 分科会の設置について  
研究評価委員会分科会の設置について、資料1に基づき評価事務局より説明。  
出席者の紹介 (評価事務局、推進部署)
3. 分科会の公開について  
評価事務局より資料2及び3に基づき説明し、議題6、「プロジェクトの詳細説明」及び議題7、「全体を通しての質疑」を非公開とした。
4. 評価の実施方法について  
評価の手順を評価事務局より資料4-1~4-5に基づき説明した。
5. プロジェクトの概要説明
  - 5.1 「事業の位置付け・必要性」、「研究開発マネジメント」、「研究開発成果」及び「実用化・事業化に向けての見直しおよび取り組み」について  
推進部署より資料5に基づき説明が行われた。
  - 5.2 質疑応答  
5.1の説明内容に対し、質疑応答が行われた。

【松永分科会長】 ありがとうございます。

技術の詳細につきましては議題6で扱いますので、ここでは主に事業の位置づけ・必要性、マネジメントについて議論する場とさせていただきたいと思えます。

それでは、委員の皆様から、ただいまの説明に対して御意見、御質問等をお願いいたします。

【小島委員】 例えば事業の成果から取得された特許を企業が独占的に使う場合、成果の扱いとしてどのようなポリシーができていのかというのが質問の1つ目です。2つ目は、マクロで見たとときの指標になるので、特許を使いたいという問い合わせの件数と、NDAが締結された件数を教えてください。

【大平PM】 御指摘ありがとうございます。

両方とも極めて重要な指標であると理解しております。特許の利活用についてはケース・バイ・ケースで判断していきたいと思っておりますけれども、なるべく積極的に活用していただくような方向性として考えてございます。

NDA、もしくは、利用に関しまして、特にユーザーさんの利用は1つの指標であると考えてございます。まだ具体的にNDAの締結まで至っているというものは、私のほうでは承知しておりません。そこについて、対外的に結んだということを公表していくのかどうか、これは関係者の方々の御了解を得ながらやっていくものとは思いますが、使われているということ自体につきましては何らか積極的に公表していきたいと思えます。これは、特に前プロのあたりもそうなのですけれども、私どもの国プロの成果を使っているということをユーザーさんのほうで対外的に発表していただくような御理解も必要かと思っております。

【松永分科会長】 よろしいでしょうか。

【亀山委員】 先ほどの説明の中で、5頁目のところで国際展開というキーワードに触れられていたと思い

ます。御承知のように、日本がこれから国際社会の中でCO2削減というミッションを達成することについて考え方も少し変わってきています。2030年までは約束どおりですが、2050年においては80%削減ということがあるにしても、日本の技術をどんどん海外に展開することによってのCO2削減貢献度というあたりを特に経産省を中心にいろいろ検討されているようです。この燃料電池という技術が国内向けの技術展開だけではなくて、大きい市場がある海外への展開について、この中間評価の時点での意義づけをお聞かせください。また、ここで議論されているような低コストで耐久性があって性能の高いものができたときには、どれくらい海外へのインパクトがあるか、そのためにはどういう国際展開をしていったらいいか、国際的なレベルで言うと、燃料の仕様から、使われ方とか、標準仕様をどう日本のこの成果で確立していくかというあたりも、キーワードが国際展開など書いてあったものですから、それについて現在どのように意識されているかをお聞かせいただきたいと思います。

**【大平 PM】** 国際展開に関しましては、恐らく2つあるかと思っております。製品としての国際展開と研究としての広がり、これをどう考えていくのか。

まず前者の製品に関しましては、世界的な環境がポジティブな方向に動いています。それは脱内燃機関・電動化の流れの中で、バッテリーだけではなくてFCについても対象になっている。中国の最近出た政策の中でもFCVに対して大きなクレジットをつけてあったり、フランス等でも燃料電池は当然対象であったりと聞いてございます。一方で、普及にあたりましては、技術というよりも社会的な制度をどのように考えていくのかというところで、例えば米国におきましても、現状、例えば海底トンネルの中は走れないとか、そういった事情があると聞いてございます。そこに関しましては、例えばDOEと連携しながら、日本が取り組んできた規制・基準づくりに関する情報を提供しながら市場環境の整備をしていきたい。製品に関しましてはそういう環境整備を考えております。

研究のほうにつきましては、どこまで日本独自の技術でやるのか、それとも海外と連携していくのかということになるわけでございますけれども、足の長いほうに関しましては、具体的な取り組みについてはこれからですけれども、例えばフランスの研究機関、欧州の研究機関から一部、日本のプレイヤーと情報交換できないのかと。非白金系の触媒とか、評価の方法論とか、そこについて情報交換できないのかということをお願いいたします。当然ながら、今の自動車を考えても日本の技術だけで世界のマーケットを取れるわけではございませんので、仲間をつくり、広げていくという観点で、研究の面では、非競争領域になりますけれども、その広がりを積極的に進めていく。

繰り返しになりますけれども、製品に関しましては市場環境の整備をしていく、研究に関しましては非競争領域でのつながりをさらに深めていくということをお願いいたします。

**【松永分科会長】** ほかの委員の方、御意見、御質問はございますでしょうか。

**【里見分科会長代理】** 今、大きな意味での普及とか連携というお話がありましたが、なにしろコストを1/10にしなければいけないという難しいところをやっている中で、海外への展開もあります。触媒に対しては、幾つかのテーマが走っていると思いますが、そういう中で、まずは情報共有して、その確かさを議論するなどして取り組みを効率化するなど、各テーマ間でどうやって協調しているか、各実施者のアイデアで競争していただくことは競争していただくにしても、どうやってうまく融合していくかというマネジメントみたいなところはどのように進められてきているのでしょうか。

**【大平 PM】** テーマ間それぞれが単独で完結するようなものではないということは承知しています。なるべく融合が図られるように、特に評価・解析技術につきまして、材料のコンセプトにどのように展開するのかということにつきましては重要な課題と認識しております。

1つの方法論として、途中で触れましたとおりビームラインの利活用ということで、前のプロジェ

クトであればビームラインのテーマの中で完結していたのですけれども、そこを横に広げる。これは、私どもと実際に進めています FC-Cubic 等々が中心になりまして、プロジェクト内での提案公募というのがあるのですけれども、公募させていただきながらいろいろ御提案をいただいて、そこで融合を図るような取り組みはさせていただいております。もちろんこれだけではなくて、先ほど申し上げたとおり、材料コンセプトの理論化とそれを支える評価・解析技術というのはまさに表裏一体でございますので、後半につきましては統合するような方向に進めたいと思います。そこは、例えば大きな委員会をつくってやるというものもちろんあるのですけれども、やはり各論で個別の事業者様と具体的に議論しながら進めていきたいと思っておりますし、その議論につきましては既に進めさせていただいているところでございます。

【松永分科会長】 よろしいでしょうか。

ほかの委員の方、何か御質問はございますでしょうか。

【出来委員】 成果の普及に関して、目に見えるアウトプットとして、我々アカデミアのほうでは論文というようなことで出てくるわけですが、受賞実績や論文に関して、本当に NEDO のプロジェクトそのものなのかどうかよくわからないところもあります。どのような波及効果があるのか、例えばサイテーションとか、その辺も含めた解析は NEDO でやられているのでしょうか。この辺が私どもに見えなくて、論文の本数だけでいいというようなものでもないと思います。その辺はいかがでしょうか。

【大平 PM】 御指摘のとおり、論文もしくは特許が出たからといって、それがどのような意味を持つのかというのはありますけれども、1つの定量的な指標として出させていただいております。ただ、その具体的な解析方法論についてはどのようになるのかというのはすぐ出てくるものではございませんけれども、小島委員からも御指摘がありましたとおり、逆に言えば成果は論文だけではなくて、どのように企業に関心を持ってもらっているのかということの方が指標として重要かと思っています。関心を持ってもらって、NDA を結ぶなり、共同研究を結ぶなり、そこでの成果、特許等々の関係性は整備する必要があると思います。繰り返しになりますけれども、特許に加えて、いかにこの成果に関心を持って共同研究的なものにつながるかということを経後の評価軸にしていきたいと思っております。残念ながら、まだその中間期、2年半でございますので、そこまでは至ってございませんけれども、後半に関してはそこを重視して、なるべく活動が進むような動きをさせていただければと思っています。

【松永分科会長】 ほかの委員の方、ございますでしょうか。

【山田委員】 今回のプロジェクトの目標のところに MEA のコンセプトとか設計指針という言葉が多く出てきます。その設計指針、こちらに動かせばいい MEA ができるということが出てくると思うのです。その確からしさについてはどのように検証していく計画があるのでしょうか。

【大平 PM】 詳細につきましては今後関係者と議論させていただきたいと思っておりますけれども、評価の軸につきましても恐らく1つの方法論ではなくて、さまざまな評価の中でどうかというのをある程度幅を持って見ていく必要があると思っています。これは前プロジェクトでもそうだったのですけれども、ある評価方法ではいい材料が、ある評価方法では余役に立たないというのが出てきているわけで、なぜ役に立たなかったのかということについて詰めていくとか、評価・解析に関しましては、一方で材料のコンセプトに取り組んでいただいている方々においても評価方法をやっているわけでございますので、そこでの評価の突き合わせをしながら、こういう条件ではこうだ、こういう条件ではこうだというようなものについてデータをとりながら出していきたいと思っております。繰り返しになりますが、1つの解ではなくて、こういう条件下ではこうだというのをさまざま提示させていただきながら、確からしさと言うと語弊があるような気がしますけれども、ある意味信頼度というのは高めたいと思っています。

【松永分科会長】 ほかにございますでしょうか。

【安部委員】 本プロジェクトは非常に基盤的なもので、すごく重要なものだと思います。こういう基盤的な事業は継続性が非常に重要であって、まだ中間評価の段階ですけれども、今後、このプロジェクト以降の継続性についてはいかがでしょうか。

【大平 PM】 研究開発を行わせていただいているのでございますけれども、これは極めて国の政策と連動してくるところでございます。例えば、私が先ほど申し上げたように 92 年から固体高分子燃料電池をやっているわけで、いつまで国のプロジェクトとしてやっていくのかというような議論はございますし、一方で、先生が御指摘のとおり、長い話でございますし、人材育成の観点も含めて、ある程度旗を立ててやっていくというところがあるわけでございます。予算の話についてはまだまだ先の話ですので見えませんが、例えばこれが一部、評価技術であったり解析技術であったりがいかにその先自立化できていくのか、これは 1 つのテーマとして私どもは認識しているわけでございます。例えば燃料電池の評価技術に関しましては、山梨県の研究施設で評価をやっているわけでございます。そういったものを核にしなが技術を永遠に継続させていくというような方法論もございます。国プロでやっていくというのはありますし、自立展開も見据えながら、あわせて考えていきたいと思っております。

【松永分科会長】 ありがとうございます。

ほかにも御意見、御質問があるかもわかりませんが、予定の時間が参りましたので、次の議題に移らせていただきたいと思います。

(非公開セッション)

#### 6. プロジェクトの詳細説明

省略

#### 7. 全体を通しての質疑

省略

(公開セッション)

#### 8. まとめ・講評

【松永分科会長】 それでは、議題 8 の「まとめ・講評」に入らせていただきます。

ここでは、最初に申し上げましたように、評価委員の方から 2 分程度で講評をお願いしたいと思います。順番ですけれども、山田委員から順番にいきまして、私が最後という形で講評していただければと思っております。

それでは、山田委員、お願いいたします。

【山田委員】 今日はいろいろな結果を見せていただいて、かなりの割合で世界初のデータもありますし、それに向けて NEDO が十分な予算を注ぎ込んで世界初のデータが出て、それがまさに今使えるような状態になったのではないかと思っております。今後は、これをいかにして使うかということに問題がシフトするだろうと思います。

私も企業の人間なので言いにくいところもありますけれども、日本の特に企業は、自前主義というか、オープンイノベーションが苦手で、なかなか国プロで出てきた成果を素直に受け入れることができないところがあります。その辺のマネジメントというのはすごく大きな話になるのですが、そこは NEDO なり国が指導するような形で大きな枠組みをつくっていただきたい。そこから次の 2

年で得られた結果をまとめることによってこのプロジェクトを完成させていただきたい。そうするとすごくいいプロジェクトで終われるのではないかと感じております。

【出来委員】 長時間にわたってありがとうございました。

非常におもしろく思っ、いろいろ技術的な内容について興味を持ってきました。今回は評価ということでございまして、これが NEDO プロジェクトとして本当にどうなのかということになってまいりますと、若干、これでいいのかなと思うところもございました。

皆さん各分野で頑張っているのはよくわかるのですが、FC の技術が日本の基盤技術になるために個々の先生方がやっておられる研究がどのようなポジションを持っているのかということを常に考えながら日々の研究開発をやっていただければありがたいと思います。常に日本の産業基盤になるように、自分たちのやっている研究がどう寄与するかということ日々問い直していただかないと成果のアピールとして、なかなか難しい。そこをぜひともお考えいただきたい。ついつい我々アカデミアの人間は興味が優先しますが、興味だけではなくて、同時にその点もお考えいただきながら進めていただければと思います。

【小島委員】 午前中のプロセスの実用化技術のところは、企業の方々が量産も含めてどういうものをいつまでに仕上げようという取り組みをされていたので、一定の成果が出た段階において各企業で判断されるのだと思います。個人的に、こういうところで頑張ろうと思っている企業にこういう形でお金がちゃんと入っていきながらレベルアップしていくのだというのは企業の立場から見ると非常にわかりやすいところがあるので、何らかの形でこれが残ればよいと思いました。

後半の基盤的なところでは、残り 2 年半の間にそれがより実り豊かに、20 年、25 年に向かってレベルアップを図るために、分析・解析技術も含め、それぞれが相互乗り入れしながら、自分たちの特徴がどういうところにあるのだということと、持っている技がいかに切れ味いいかということ内外に示して、あそこの技術を見に行くとおもしろいとか、切れた技で見えた断面はすごいぞ、ああいう技が欲しいというところが両面で見えてくるとより豊かになると、今日は実感いたしました。後半はプロジェクトのマネジメントの中でそういう運営に一步でも二歩でも近づくといいなと思いました。

【亀山委員】 冒頭で大平 PM が燃料電池開発は 1992 年からやっているということで、25 年の長きにわたってやっている。だから、日本は世界で老舗になって、ずっと頑張ってきているわけで、今後さらに 25 年やると、国のエネルギー基本計画では 2040 年に突入するわけです。そうすると、2040 年のところでは国内市場だけではなく海外市場での戦い、外から水素を持ってくるだけではなくて、水素の技術を海外に展開する。そういうときに小島委員が言われたように切れ味のいいものを日本が持っていれば世界に切り込んでいけるという意味で、そういう長期的な意味からさらに 25 年は続けたほうが良いというのが率直な印象です。

それから、そのための布石として、このプロジェクトは 2019 年に一応終わるわけですが、その成果を世界にアピールする場としてちょうど 2019 年に東京で世界水素技術会議、WHTC 2019 というのが開かれますので、そこをショーケースとして世界にアピールすることは検討しているのではないかとことです。

3 つ目は、これがスタートした 1 年後にエネルギー基本計画がスタートして、そこでは Society 5.0 という社会をつくっていかうとしています。ビッグデータを使って IoT とか ICT を積極的に進め、自然エネルギーと化石エネルギーが共存する、非常にエネルギーがフレキシブルな中で社会をつくって

いこうというのがスタートしたわけです。その1年前にこの企画が出たわけで、その1年後の新しい社会をつくらうという国の政策に対して、このプロジェクトがその考えを取り入れることによって、非常に変動があるエネルギー源に対してこの燃料電池技術がちゃんと働くのだ、Society 5.0の中心的なエネルギー変換技術になるのだ、というあたりももう少し検討すると、より価値が高くなるのではないかなという気がいたしました。

【安部委員】 前半と後半と大変興味深く拝聴させていただきました。

前半の実用化については、開発の深度に相違があるところもあったと思うのですが、実用化に向けて概して順調に進んでいるような印象を受けました。

後半の普及拡大化基盤技術については、非常に新しいコンセプトがいろいろ出てきていて、ものすごくおもしろいと思いました。ぜひこのコンセプトをどんどん続けていただければと思います。特に材料探索についてはまだまだやることが多いと思いました。これをここで一旦プロジェクトを終了してやめてしまうと、あっという間に他国に技術的に追いつかれてしまうのでこのプロジェクトでやった意味がなくなります。ぜひ継続してこういうプロジェクトを続けて、どんどん新しいコンセプトを出していただくような仕組みをつくっていただければと思います。

【里見分科会長代理】 もう皆さん大分言っておられまして、実用化のほうは企業の皆さんが取り組まれて実用化目前まで持ってこられて、大変すばらしい成果だったと思います。燃料電池はまだ標準化された技術ではなくて、最終製品として使うにはかなりカスタマイズというか、それぞれ違った技術がありますので、これからは NEDO のプログラムというよりは各社さんで実際に使えるようなカスタマイズ化、ユーザー対応でどういった技術開発をしていくかというところをしっかりとやっていただくのが重要かと思います。あと一步のところではないかと思います。

それから、普及基盤のための技術ですけれども、先ほどからお話がありますように、コンセプト創出と評価・解析技術という形で、かなりフェーズが違う、あるいは適用時期が違うものが含まれているので、各テーマの位置づけをよく認識して進めていただきたいと思います。このプログラムでは何を出すことが一番重要なのかというのをもう一度確認いただいて進めていただくということが次につながる、あるいは効果的な成果になるのではないかと思います。

評価・解析技術はなかなか適用が難しく、先ほども言いましたが、いかに使ってもらえたかというところをアピールできるような取り組みが、今後必要なかなというところもあります。その中でフェーズがかなり違うところとか、今の時点では、一部まだ適用が十分検討されていないところまで踏み込んでいるようなところも見えたりするので、その辺はもう一度ニーズを整理して取り組んでいただくのがいいのではないかと思います。

【松永分科会長】 ほとんどおっしゃられたので、まとめるという意味合いで申し上げるつもりは全くないので、実用化技術については皆様がおっしゃるとおりで、それぞれ成果のレベルは同じではないです。これからそれぞれの企業で事業化を検討していただければ成果が上がるのではないかと考えています。

午後の基盤技術に関しては、全体として NEDO のプロジェクトというのは国の税金を使っているわけで、いかに日本の技術が産業として世界を席卷していくのかというところにつながらないといけません。そのための仕掛けは何なのだというのは、明確な答えを持っているわけではないのですが、例えば、先ほど言われた 92 年から続けてきただけのデータベースがあるわけですし、今回の解析とか

評価技術というのはデータベースを積み上げていくためには非常に重要だと私は思っています。それを我々が国としていかにうまく持っていくのか、特に日本のメーカーにどうやってうまく使ってもらうのかというところを最終のターゲットという形では目指すべきです。その途中段階にあることは間違いないし、その中にすばらしいデータも出ていることは間違いないと思います。

あとは、使ってもらうためには、MEA というのは複雑な系で、評価のほうも複雑になってしまうとだんだんわけがわからなくなるので、いかに複雑なものをシンプルな形のスキームに作り上げていくかということが大きな課題ではないかと思っています。そうすることによって使ってもらう方が非常にわかりやすい、取り掛かりやすい。それを抽出していく仕事もこのプロジェクトの中ではすごく重要で、それが全部わかるとは思っていませんが、将来に向かってこういう展望が描けるとなると、次のプロジェクトが明確に提案できる形が出てくるのではないかと。そこのところを期待したいと思っております。

以上、私も含めて7名の評価委員から講評させていただきました。

推進部から一言ございましたら。

**【大平PM】** 本日は御評価いただき、大変ありがとうございました。

今後私どもが後半に向けて進めるに当たり、さまざまな御示唆をいただいたものと思っております。特に継続性というのが大事なわけがございますけれども、そのためにも、この技術が使われて世の中の役に立っていく姿をどのように見せていくのか、これも非常に重要な側面であろうかと思っています。これは単に我々ができた、できたということだけではなくて、それを実際に使っている方々から発信していただく、まさに役に立ったと言ってもらえるような成果につながるように、体制の動きも含めて今後の運営に反映させたいと思いますし、随時皆様方のお知恵を拝借しながら進めたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

**【松永分科会長】** ありがとうございました。

それでは、以上で議題8は終了させていただきます。

## 9. 今後の予定

### 10. 閉会

## 配布資料

- 資料1 研究評価委員会分科会の設置について
- 資料2 研究評価委員会分科会の公開について
- 資料3 研究評価委員会分科会における秘密情報の守秘と非公開資料の取り扱いについて
- 資料4-1 NEDOにおける研究評価について
- 資料4-2 評価項目・評価基準
- 資料4-3 評点法の実施について
- 資料4-4 評価コメント及び評点票
- 資料4-5 評価報告書の構成について
- 資料5 プロジェクトの概要説明資料（公開）
- 資料6 プロジェクトの詳細説明資料（非公開）
- 資料7 事業原簿（公開）
- 資料8 今後の予定

以上